

中・高生の英語力 国の目標に届かず

「聞く・話す・読む・書く」4技能育成に課題

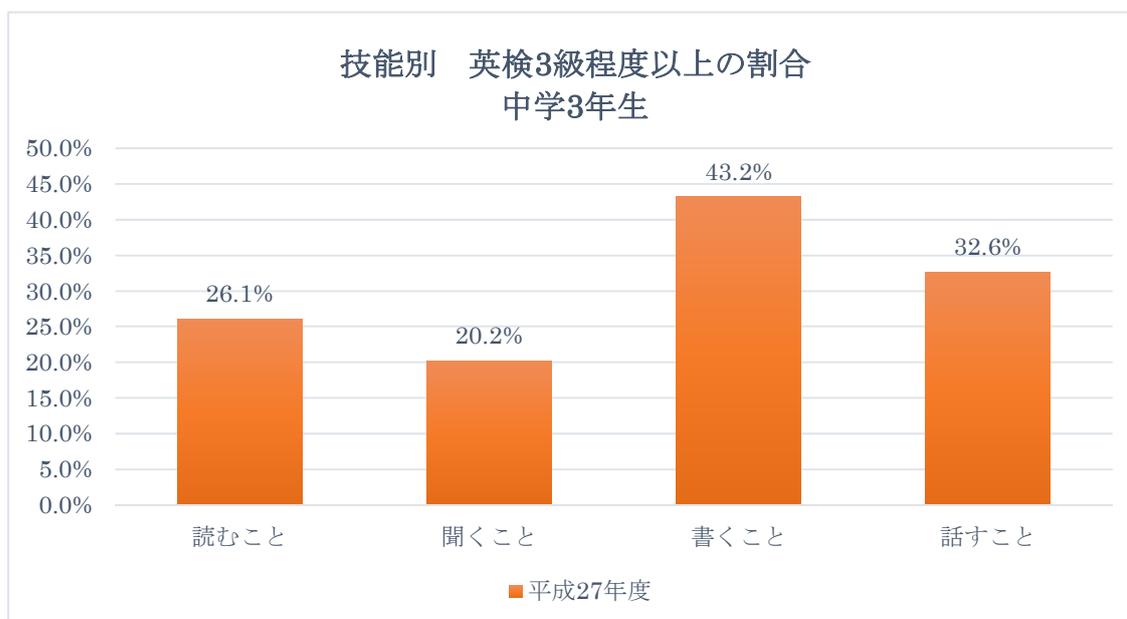
旺文社 教育情報センター 28年2月8日

文部科学省はこの度、平成27年6～7月に実施された英語力調査の速報結果を発表した（英語教育改善のための英語力調査）。それによると今回調査対象の中学3年生と高校3年生の両者において、「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと」の4技能育成の問題点と国が定める目標達成（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2～2級程度以上を達成した生徒の割合50%）への課題が明らかになった。

文部科学省は平成31年度から中学3年生を対象とした英語4技能の全国的な学力調査を予定している。今回の調査はその実現可能性を確かめる意味を含め、中学3年生約6万人（国公立約600校）、高校3年生約9万人（国公立約500校）を全国から無作為抽出して実施された。文部科学省は今回の調査結果を通じて生徒の英語力を4技能ごとに把握し、その分析結果を今後の各学校での指導・評価の改善に役立て、生徒の英語力を着実に向上させるとしている。

●中学3年生 4技能のバランスが課題

中学3年生は今回が初めての調査となる。国が「第2期教育振興基本計画」で提示した英検3級程度以上とする学力をクリアした生徒の割合は、4技能別に下記のような結果になった。

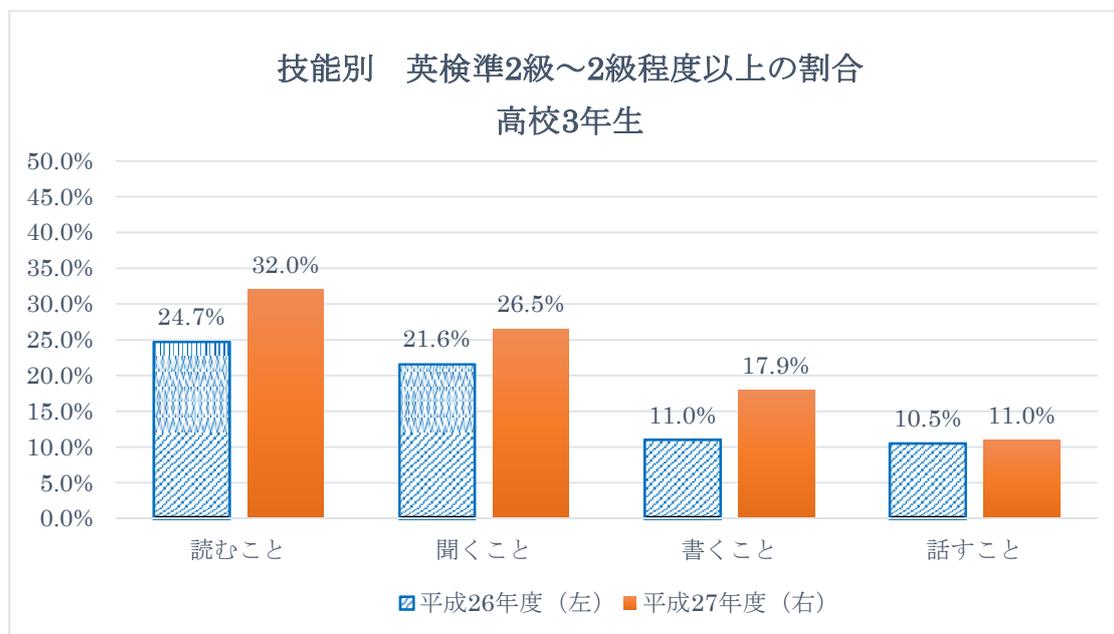


文部科学省資料より

調査実施の時期が3年生の6～7月のため、卒業段階までにはその後の学習によって各割合はこれより増加すると考えられるが、基本計画中の目標50%までは大きな隔たりがあると言える。また43.2%が英検3級程度以上となった「書くこと」の結果では0点の生徒も12.6%おり、できる生徒とそうでない生徒の二極化が明らかとなった。

●高校3年生 前年度より各技能ともに向上しながらも、目標まで大きな隔たり

一方、今回が2回目となる高校3年生の結果では、基本計画で提示した英検準2級程度以上の学力の生徒の割合は昨年度と比較して下記のようにになっている。



文部科学省資料より

こちらでも目標の50%に届かない結果ではあるが、平成26年度の結果と比較して4技能いずれにおいても英検準2級程度以上の力を持つ生徒の割合が増加した。課題は技能ごとの能力差が顕著な点であり、今後は達成率の低い「書く」「話す」の能力育成が求められる。

●全日中が調査実施について意見・要望書を提出

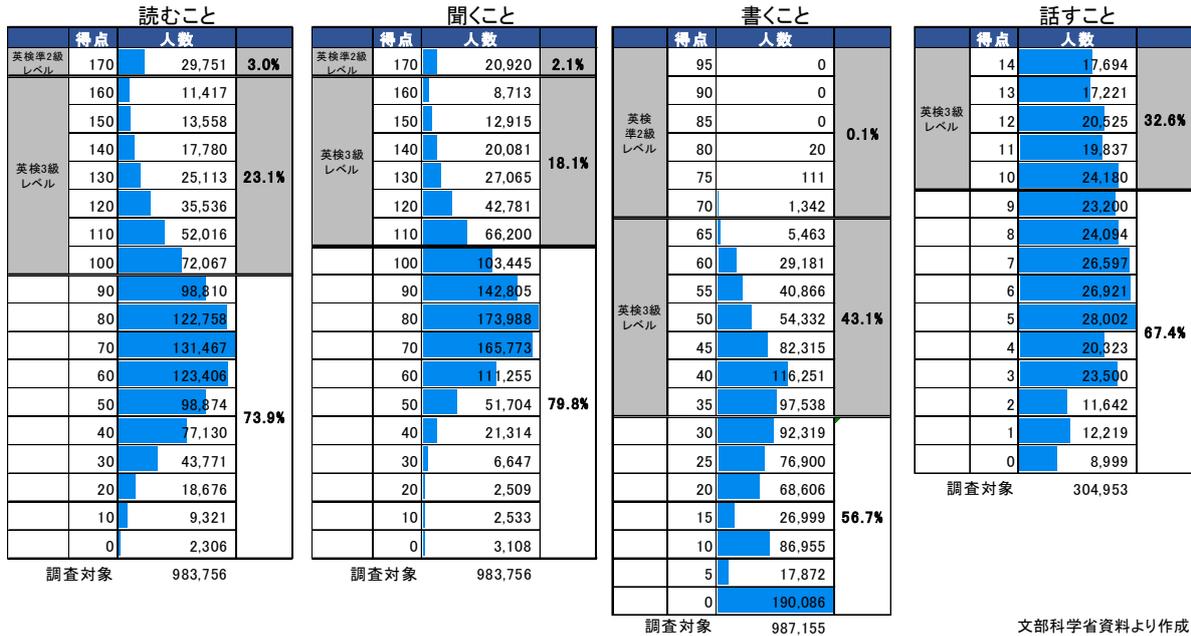
また、今回の調査について全日本中学校長会からは、生徒の英語力を着実に向上させるための現状把握と分析という趣旨には賛成しながらも、調査結果が高校入試の資料として使用されるようなことは絶対に避けなければならないとの意見、またスピーキング、ライティングの試験実施と採点については教員がその役を担う場合その負担増について問題提起がなされた。

文部科学省初等中等教育局が開催する「全国的な学力調査に関する専門家会議」では、平成31年度以降、3年に一度程度、英語4技能の学力調査の実施を検討しているが、調査の頻度や具体的な実施・採点方法等については引き続き今後も話し合われることとなる。

生徒全体のスコア分布 中学3年生

全体の傾向

- 4技能全てにおいて課題がある。4技能がバランス良く育成されていない。
- 特に、「書くこと」の得点者は英検3級程度以上の割合が43.2%と高いが、一方で、無解答が12.6%となるなど全体にバラツキがある。



生徒全体のスコア分布 高校3年生

全体の傾向

- 依然として4技能全てにおいて課題がある。昨年度同様に、特に「話すこと」「書くこと」について課題が大きい。
- 昨年度と比較して「書くこと」について無解答の割合が減少(約30%→18%)。

